

哲學研究

第百十四號

第十卷
第九冊

フーアカントの社會學概念に

於ける二三の問題

五十嵐 信

- 一 緒言
- 二 社會學の方針に關するフーアカントの所説
- 三 彼の社會學方針論に於ける諸問題
- 四 社會の本質に關するフーアカントの所説
- 五 彼の社會本質論に於ける諸問題
- 六 結語

一

社會化 (Vergesellschaftung) の内容から區別せられたその形式を以つて社會學の研究

フーアカントの社會學概念に於ける二三の問題

對象とするジンメルの思想を發展して所謂形式的社會學 (die formale Soziologie) を樹立しようとする努力が、最近のドイツの社會學界に於いて、一の力づよい傾向を形づくりにつつある。現在に於いて、かかる傾向を代表する社會學者として一般に見做されて居るのは、ベルリン大學社會學及び哲學教授フイーアカントとコエルン大學經濟學及び社會學教授フォン・ウイーゼとである。尤も、フォン・ウイーゼは、フイーアカントの近著¹⁾に對してかなり辛辣なる批評²⁾を加へ、自分がフイーアカントのそれと同一なる社會學上の立場に立つと見做されることをば忌避しようとして居る。而も、この兩氏は、その社會學概念を確立するに當つて共に主としてジンメルを基礎として居るが故に、従來の社會學が辿り來つた方針に對する態度や今後の社會學が目指すべき目標に關する見解に於いて重要な諸點を共有するのである。何れにせよ、ジンメルを以つてタルドやデュルケム等と共に輓近の社會學がその轉回を成就した點を成すものと認める私たちにとつては、彼の社會學概念がその本國に於いてその後いかに發展せしめられつつあるかは、一の看過せられ得ない問題なのである。

1 Alfred Vierkandt, Gesellschaftslehre, Hauptprobleme der philosophischen Soziologie, 1923.

2 右に對する Leopold von Wienc の批評、Kölnher Vierteljahrshefte für Soziologie, 3. Jahrg., Heft 2/3, s. 179 ff.

フォン・ウイーゼの社會學概念に就いての考察は、後の機會に譲る。ここには、少しく、フイーアカントの社會學概念を右に擧げた彼の主著の中に完成せられて居る形に就いて吟味し、¹⁾それに關聯して私たちにどつて問題となつて來る二三の事項を指摘して置きたいと思ふのである。²⁾而も、私たちは、私たちのそれとの間にかんりの距離を隔てた立場に立ち且つかかなり精密を缺くこの著者の社會學概念の論述に對して單なる消極的批評を加へることは多くの意義を見出し得ず、従つて、多くの興味を感じ得ない。この大著に展開せられて居る社會學體系のいかなる點に著者の功績を認めいかなる點に不満を感じるかを反省しその所以を究めようとする見地の下に於いて注意せられるところの彼の社會學概念の核心的思想を檢討することによつて私たち自らの將來の研究の出發點を決定することに些かなりとも資しようとする、そこに、この小論の目的は存するのである。

1 米田博士は、本書をば Ross, Principles of Sociology, 1920. 及び Park and Burgess, Introduction to the Science of Sociology, 1921. と共に純正社會學上に於ける輓近の好著とし、フイーアカントの今日の最も圓熟せる社會學論の主要思想として(一)經驗的に研究せられる特殊學としての社會學の概念(二)社會化の形式を對象とするものとしての「純正社會學」或ひは「形式社會學」或ひは「一般社會學」の概念(三)現象學的方法を重視する思想の三を擧げ、フイーアカントの名を學界に知らしめたその最初の著作

Naturvölker und Kulturvölker, Ein Beitrag zur Sozialpsychologie, 1896. 以後右の三主要思想がいかなる徑路をたつて本書に於いて見られるやうなものにまで發達し來つたかを詳説して居られる(フイアカントの社會學論、經濟論叢第一九卷第二一五號)。博士がそこに與へて居られる豊富なる指示なしには、私のこの未熟な小論は、これだけの形のものにさへもなり得なかつたであらう。

2 本書は、緒論、第一章一般的諸問題 (Allgemeine Fragen)、第二章人間の社會的稟性 (Die soziale Ausstattung des Menschen)、第三章社會的諸基本關係 (Die gesellschaftliche Grundverhältnisse)、第四章ゲマインシャフトの最重要なる歴史的諸形式 (Die wichtigsten historischen Formen der Gemeinschaft)、第五章集團現象と團體 (Die Kollektivphänomene und die Gruppe) から成る。——この中で、第五章は、その他の部分との有機的連絡をかなり欠き、且つ、所謂形式的社會學らしき最も少く發揮して居る。これは、他の社會學書に於ける社會意識論或ひは集團意識論に相當し、私たちが自らの體驗を反省分析することに於て即ち彼の所謂現象學的方法によつて、ゲマインシャフトに於ける社會意識或ひは集團意識の實在を強く主張するものであるが、私たちに對しては何ら新しいものを寄與して居ない。フォン・ウイーゼは、本書には體系と稱すべきものが全く缺けて居り古い不完全な偽哲學的な方法による社會心理學の断片があるに過ぎないが故に、かかる書を Gesellschaftslehre と稱するは不當であるけれども、最後の章はその中で最も價值ある部分であるが故に、著者が單に第五章のみを他の部分からこれに關係ある箇處精々三十頁ぐらゐを附加して *Zwey philosophische Beiträge zur Lehre von der Gruppe* と題して發表するに止めて置いたならば、あつたであらう、と極評して居る。——殘りの諸章の中で中心的部分を成すのは、第三章である。これは、トエンニス及びシユタムウティンガーのゲマインシャフト及びゲゼルシャフトの論並びにシユタムウラーの社會的關係の普遍的被規制性の説を繼承し發展して、先づ、社會的基本關係を內的結合の緊密と弛緩とに従つて體系的に分類し、それぞれの基本關係に於いて成立するところの意志方向 (Willensrichtung)、關心方向 (Interessenrichtung)、內的關係 (innere Verhältnisse)、感情動作 (Gefühlsverhalten)、諸徳 (Tugenden) を論述し、進んで、これら諸基本關係の被規制性やゲマインシャフト關係の優越性等を論證し、なほ、諸基本關係の混合や諸基本關係の基礎及び内容を論じたものである。所謂形式的社會學に對する彼の責誡は、主としてこの社會的基本關係の分析並びにそれに關聯する所說の中に含まれて居るのであるが、私たちは、この小論に於いては、直接にこの部分を考察の對象とする餘裕を持たない。

——第四章は、第三章の附録と見るべきもので、ゲマインシャフトの中で歴史的に見て最重要なる諸形式、即ち、家族・氏族及び地域團體・男子團結及び職業組織・身分及び階級及び政黨・民族及び種族及び國民・國家及び社會を考察して居る。——第二章は、第三章の如くに社會的諸基本關係を分類し且つ第五章の如くに個人及び個人意識に對する團體及び團體意識の實在及び優越を主張するための準備として、人間の稟性を成す種々なる本能及び性向を論じたものである。ここに展開せられて居るフイーアカントの心理學或ひは社會心理學は、個々の點に就いて見れば、多くの鋭い觀察を含むが、全體としては、フォン・ウイーゼが指摘して居るやうに、所謂 *Zur und Mitleinander* の諸本能及び諸性向のみを偏局的に重視して（自己感や鬭争衝動の如き所謂 *Aus- und Oneinander* の諸本能及び諸性向も考慮せられて居るが、それは、單に、これらが社會的諸本能及び諸性向を隨伴せずには出現しないことを論證するためだけに止つて居る）思辨的に構成せられた観があり、かなり冗長なものであると同時にかなり粗雑なものである。——私たちは、この小論に於いては、他の諸問題には暫く觸れずに、本書の緒論及び第一章に論述せられて居るフイーアカントの社會學の概念及び方法に關する所説をば考察の對象とする。

以下、この小論は、四つの部分に分れる。第一の部分は、現代社會學に於ける諸方針及び彼が樹立しようとする形式的社會學の方針に關しフイーアカントが本書の緒論に於いて展開して居る所説の中で上に述べた見地から見て注意せられる思想の要約であり、第二の部分は、これに關聯して私たちにどつて問題となつて來る事項の指摘並びに多少の吟味である。而して、彼の社會學は、或る社會學者にとつてはこれは自明の事實であり他の社會學者にとつてはこれは全社會學體系を攪亂する最初の誤謬であるが、社會の學であるが故に、彼の社會學概念の研究は、彼の社會概念の究

明を中心とすべきである。かくて、私たちは、同一の態度を持續しつつ第三の部分に於いて、社會の本質に關しフイーアカントが本書の第一章に於いて展開して居る所説を要約し、第四の部分に於いて、これを少しく考察し、以つて、彼の社會學上の立場の検討を通じて私たち自らのその確立に資しようとする先に掲げた目的をば追求して見たいと思ふ。

1 常識の考へ方に於いても普通の社會學者の見解に於いても、社會は、人々の間の親和或ひは結合に於いて成立するものとせられて居る。而も、この社會は、人々の間の反對或ひは分離（反對と分離とは、必ずしも同視せられ得ない。私は、人間の關係を根本的には *Zw. und miteinander* のそれ々 *Aus- und Ohneinander* のそれ々に分類する立場に立つフカン・ウィーゼの *Lehne von den Beziehungen und Beziehungsgeschehn der Menschen* をしての社會學は社會關係を根本的には *Miteinander* のそれ々 *Ansehender* のそれと *gegeneinander* のそれ々に分類する立場に立つて改訂せらるべきではないかと考へて居る。）を度外視しては理解せられ得ない。かくて、多くの社會學者は、社會の本質をば何らかの意味に於ける親和或ひは結合に求め且つ社會學は社會の學であるとしながら、實際に於いては、親和或ひは結合と同等に反對或ひは分離を重視して居り、従つて、社會學の定義とその内容が一致しない結果に陥つて居る。米田博士が社會學を以つて社會の學とせずして社會現象の學とせられる所以は、ここにあり。然るに、シンメルは、普通に理解せられて居るところに從へば、常識の考へ方は異つて、戦争の如き反對關係に立つ人々もそのままの社會を成すを見る。故に、シンメルの社會概念を採るならば、これによつて起る種々なる問題は暫く措いて、社會學を社會の學と定義することによつて陥る右の弊だけは、免れられるわけである。併し、シンメルの社會學を發展したと稱するフイーアカントのそれに於いては、親和關係及び反對關係は共に社會ではあるが、而も、何れの關係もそれが社會的なる限りはグマインシャフト關係即ち親和或ひは結合がその背景を成して居り、かかる背景を缺く關係は社會外的的關係 (*ausssozialschaftl-*

hehe (Stehverhältnis) であるから社會學の對象領域の外に屬する、せせられて居る。かくて、彼の社會は、結局に於いては、親和或ひは結合であり、かゝる社會を對象とするものとしての彼の社會學は、右に述べた弊に陥るからならざれば社會學の研究を恣意的に縮小するかせざるを得ないやうに運命づけられて居るのである。——最近、高田博士は、フイーアカントとは異つて、彼の争闘關係のみならず彼の社會外的關係をも含めた社會的關係(結合以外の)が凡て結合を前提とし結合に基けられてのみ成立し得ることを論證しようとして居られる(結合の上位、社會科學、第一卷第一號)。私は、未だ、博士の説かれるところを充分に理解し得るに至つては居ないが、それに對して大體に於いて下地寛令氏と同様な疑問を抱きつつある(高田博士の「結合の上位」に就て、社會學雜誌、第一六號)。

二

一 現代社會學に於ける二つの主要方針

フイーアカントは、先づ、トコエルクと共に、現代社會學に於ける二つの主要なる方針として歴史哲學的百科全書的方針(die geschichtsphilosophisch-encyklopädische Richtung)と分析的形式的方針(die analytisch-formale Richtung)とを區別し、彼自身が前者を排し後者に屬する所以を説いて次のやうに云ふ。

前者は、舊來の方針で、殊に、普通に社會學の創始者として擧げられるレントやスペンサーは、これに屬する。彼らは、周知の如く、普遍的進化法則及び類型的状態を構想し以つて人類進化史の梗概を與へようとして居る。従つて、社會學の對象は、この

方針にとつては、第一に、全體としての人類の進化段階並びにその法則性及びその原動力であり、第二に、民族又は種族の政治的經濟的構造並びに文化的業績の方面と其の根柢を成す力及び關係とである。——然るに、後者は、新興の方針で、その問題に於いて前者よりも遙かに控へめであり人を惹くことも僅かである。その創始者は、ジメンメル及びトエニスであり、その他にデュルケームも挙げらるべきであるが、社會學を以つて社會化の諸形式の學 (*Lehre von den Formen der Vergesellschaftung*) であると見るジメンメルの定義は、その意味が正しく理解せられその文字に拘泥せられないならば、この方針全體の根柢となし得る。社會學の對象は、この方針にとつては、その大いさその持続その内的意義に係りなく凡ての團體 (*Gruppe*) である。即ち、社會的と稱せられる各種の特殊な關係が成員の間に存在すると云ふことは凡ての團體の本質を成すのであるが、社會學の課題はこれら諸關係の研究就中その記述及び諸類型の發見である、とこの方針は見るのである。¹⁾

1 フォイアカントは、S. 12f. には、前者を百科全書的歴史哲學的方針と稱し後者を分析的個別科學的方針と稱して、前者に屬する社會學書のうちには Bartl, Ward, Giddings, Katzenhofer, Oppenheimer, Scheler, Schaffle, Spencer, Müller-Lyer, Dittmann, Spann, Ethwood, Dupréel (最後の三者は次の方針との中間に位する) の著作を挙げ、後者に屬する社會學書のうちには Tönnies, Simmel, Althusz, Vierkandt, Tarde, Me Douglall, Durkheim, Leopold の著述を挙げて居る。一見して注意せられるやうに、この分類は、

これらの社會學書が社會學をば百科全書的歴史哲學的學として樹立しようとして居るか個別科學的形式的學として樹立しようとして居るかに關するは云ふよりは、寧ろ、彼自身が何らかの影響を蒙つて居る書であるから然らざる書であるか（その影響の種類或ひは性質を問はずに）に關するものである。

人類の文化及び歴史を全體として且つ全體に於いて把握することをその目標として掲げる第一の方針が、その問題の多様なることそれが生活に近いものであること等の故に多くの牽引力及び諸種の長所を具へて居ることは、云ふまでもないが、また、それが特殊な困難と獨斷及びダイレクタンテイスムスに陥る危険とを有して居ることも、明かである。——而して、第二の方針の特殊な價值は、就中、次の二つの事實の中に存する。（一）第一には、分析が我々の認識の確實と進歩とにとつて重要であると云ふことにある。この第二の方針は、社會的生活の最後の要素にまで溯らうと努力する。何となれば、社會的圈（*soziale Kreise*）の大きさや持續や内容に係りなく凡ての社會的生活に結びついて居る諸形式及び諸關係は、社會的生活のかかる最後の事實である、或ひは、少くとも、かかる最後の事實に分解せられる、と考へるからである。何れにせよ、形式的社會學と云ふ若い學科は、既に、この分析法によつて四つの或ひは六つの『ガリライ的』發見を成就し以つて我々の認識を豊かにしたことを誇り得るのである。¹⁾（二）第二には、この基本概念及び基本認識の確實性は、この方針が取る方法

(直ぐ次に述べられる所謂本質觀照の方法を指す。フイーアカントによれば、形式的社會學は社會的生活の最後の要素にまで溯るべきものであるが、このことは現象學的方法によつてのみ可能なのである。)によつてのみ保證せられる、と云ふことである。他の方法が主として思辨や演釋や構想に陥る傾向を有するに反して、この方針が取る方法のみは、論理的に確證せられて居る精密なる基本概念の確立に到達する。形式的方法は、別の方針とは反對に、大なる度合に於いて、直觀(Anschauung)の範域の中に殊に直接に明證的なる直觀(unmittelbar evidente Anschauung)の範域の中に止り得る。何となれば、社會的生活の最後の基本事實は、我々凡てが日常的生活に於いて直接に接し得るものであり、従つて、本質觀照(Wesensschau)の方途によつて明かにせられ得るものだからである。かくて、形式的社會學は、その大なる部分に於いて、社會の現象學と一致するのである。²⁾

1. フイーアカントは、かかる『ガリライ的』發見として、先づ、從屬本能(タルド及びマクドーガルの發見)・社會的諸基本關係(ハトエンニース・シユタウデインガー及びフイーアカントの發見)・社會的諸關係の普遍的被規制性(シユタムラー及びフイーアカントの發見)・ゲマインシャフト關係の餘他の諸基本關係に對する優越(フイーアカントの發見)の四を擧げ、更に、『發見』の性質が前四者は、著しくないものとして、我(我意識)と自己感との個人を超えての擴大及び我等意識と集團的自己感との存在(マクドーガル及びフイーアカントの發見)、變化する諸個人をその單なる運載者とする社會的客觀的構成物の存在(フイーアカントの

發見)の二を擧げて居る。要するに、これらは、フイアーカント自身がその社會學體系の中心に置いて居る思想であるが故に、彼の社會學をその内容に立ち入つて検討するには、主としてこれらの諸思想を吟味しなければならない。併し、その餘裕を持たない私たちは、今は、單に、彼の社會學概念の論述を少しく考察する(それも私たち自らの社會學概念の確立に役立つ限りに於いて)に止らうとするのである。

2

フイアーカントは、彼が社會學に於ける形式的分析の方針が取るべきものと稱する現象學的方法に就いて、實質的には、ここに紹介した以上の説明を本書の何處にも與へて居ないので、彼がこれによつて何を意味して居るかは、頗る明瞭を缺く。他に、これに關する彼の所見を稍々窺ひ得る箇所は、序文の中の次のやうな言葉のみである。『本書の對象は、寧ろ、社會的生活そのものの最後の諸形式・諸勢力・諸事實であり、並びに、凡ての歴史的發展に係りなく社會の本質から結果する諸構成物である。本書の目標は、根本的に云へば、既にシンメルが思ひついて居たもの而も當時の研究状態に於いては未だ解決せられなかつたものと同一である。それは、全く新しい爲方によつて最後の光驗的な事實の包括的な系列を確立することをば我々に可能ならしめるさるる現象學の發達によつて、初めて解決せられるものとなつた。これは、合理的自然科学が凡ての現象を最後の要素及び自然法則から導き出すのに似て而も同時にそれとは全く異つた爲方に於いて、我々の領域に對して、見渡し難く豊富な事實を比較的僅少な成分たる原現象(Urphänomen)に還元する可能をば我々に與へ、それと共に、更に、經驗的歸納的であり多かれ少かれ偶然的である類型の代りに事物の『本質』から結果すると云ふ點に於いて無制約的論理的優越を有する類型を設定する可能をば我々に與へるのである。』(Vorwort, S. III)——なるに、彼は、『最近』(Kremer)の著書『Soziologie als Wissenschaft, 1922』に彼は、『不注意』(?)の書の標題を『Soziologische Wissenschaft』を誤つて居る(に對して短評を加へ、社會學の核心的領域を現象學的とする著者の所説は確かに至當であるが、この見解は理論としても全然新しいものではなく研究の實際に於いても全然實現せられて居ないわけではない)、Alvarezの『ケルリン大學學位論文』(Reine Soziologie)は既にこのことに觸れて居り、自分は『Kölnner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaft, I, Jahrg. II, Heft 1』に同様な要求を述べた(次々『Sozialwissenschaftliche』に於いてそれを實行しようとする試みて居る、同時にWahlterの『Husserl's Jahrbuch für Philosophie, Bd. VI』に『マインハイムカントの現象學を與へて居る』を述べ居る(Kant-Studien,

Ref. XXX., Heft 1/2. S. 220f.)、これによつて察すれば、彼は、その所謂現象學的方法をば Kraemer や Wähler (Almanz) の右の書を私は未だ知らない、のそれと同様なものも考へて居るのである。

尤も、社會學の分析の方針は、少くとも現今の段階に於いては、現代の一つの要求即ち綜合に對する要求をば殆ど充さないであらう。かく云ふのは社會的生活の領域に於ける多くの個別的認識を結合して一の總體像をつくらうとすることが今日多くの方面から願望せられ努力せられて居るからである。併し、第二の方針も、この願望をば、それが一般的に可能なる限りは、實質的歴史哲學がこれまで企てて來た如くに充す。而も、かかる見地に立つ場合には、歴史哲學と云ふ舊稱をば社會學と云ふ新稱を以つて代へることが正當であるか否かと云ふ問題が、起つて來るのである。確かに、分析の方針は、生活の現實と豊富とを甚しく抽象することに基いては居るが、この點に於いては、凡ての科學の本質を分有して居るに止る。何れの個々の科學も、實在の完き像を與へはしないが故に、生活が絶えず繰返して科學の偏局性に對し抗議を提出することは、異とするに足りない。而して、このことから、綜合を求める叫びが科學に對しても起るのであるが、哲學以外の科學が一般にかかる總體像をつくり得るか否かは、疑問である。或ひは、この問題は、恐らく、斷然否定せらるべきものであら

う。

二 社會學に於ける個々の諸方針

フイーアカントは、現代社會學に於ける主要方針として上述の二つを區別した後に、更に進んで、彼の奉ずる所謂形式的社會學の性質を一層詳しく規定しようとして次のやうに説く。

今日、社會學は、何らかの爲方に於いて人間の團體を論ずる即ちその身體的又は心理的屬性及びその産物殊に人間の文化を論ずる雑多な努力に對する總稱である、と定義せられねばならぬ状態にあるが、自分は、この社會學と云ふ語が有する多くの雑多な意義の中から、次の七つを注意しようと思ふ。(一)一切の人間の活動及び産物をばそれらの運載者が所屬する社會に關係せしめ、且つ、それらをばそれらが後者に依存すると云ふ見地に於いて把捉する、一の考へ方としての社會學(例へば、協會や學會や雜誌の名稱として用ゐられる社會學に於ける如く)。社會學と云ふ語のこの意義は、或る程度まで正當であり、形式的社會學によつて有効にせられ且つこれに結合せらるべきものである。(二)全體としての人間の文化の(例へば、ランプレヒトやブライ

ジツヒに於ける如く)又は個々の文化財の(例へば、スベンサーやミュラーリアーに於ける如く)進化法則進化形式及び因果性を究明する、歴史哲學としての社會學、この場合には、文化を運載する社會即ち種族や民族の進化法則或ひは全體としての人類の進化法則も論せられるのではあるが、併し、これを歴史哲學と云ふ舊稱の代りに社會學と云ふ新稱を以つて呼ぶべき理由は、存在しないであらう。(三)凡ての個々の精神科學が文化の運載者たる社會の個々の諸方面を取扱ふに反して云はば精神科學の潜在的中心點を明かにする文化社會の本質の學としての社會學(例へば、ヅントが彼の『論理學』第三版に於いて展開して居る社會學のプログラムに於ける如く)或ひは、精神科學全體に對する綜合的科學としての社會學(例へば、オツペンハイマーやゴルトシャイトに於ける如く)。かかる社會學は、百科全書的となる。綜合が科學的價値を有することは争はれないが綜合は必ずしも一の新しい科學を形成しない。(四)淘汰遺傳環境の影響流行病の作用形體的繁榮と精神的繁榮との關聯身體的健康と精神的健康とに對する文化の影響等を中心問題とする、社會人類學とも又幾分かは社會生物學、社會衛生學とも呼ばれる、自然科學的社會學。これは、人間に對する生物學の應用である。それが自然科學の諸概念及び諸思想をば餘りに精神及び文化の

世界に適用し過ぎぬ限り、その問題提出は、それ自身に於いては勿論よく、その業績は、價値多い。(五)民族論としての社會學例へば、ゴビノ！ラプーグアンモン・ヴォルトマン・チエンバーレーン等や人類地理學派に於ける如く。この方針は、充分に批判的に遂行せられるならば、歴史的認識の價値多い補充となる。(六)種族の社會的精神的文化財の學としての社會學例へば、土俗學的文獻に屬する旅行記に用ゐられる社會學に於ける如く。かかる用語法は、頗る不當である。(七)團體の屬性の學としての或ひは相互作用及びその産物の理論としての社會學(フイーアカントは、自らこの第七の方針の代表者を以つて任ずる)。

これらの諸方針を概観すれば、三種の區別、即ち、(一)社會學的科學と社會學的方法との(二)體系的問題と歴史的問題との(三)純正社會學と應用社會學との區別を立てる必要のあることが、覺られる。單に言語的事實的性質のものたるに止り價値判斷を離れて居るところのこれらの區別が一般に承認せられさへすれば、社會學と云ふ語の有する意義は、甚しく明瞭となるのである。なほ、認識過程に於ける或る依存關係、即ち、(一)社會學的方法の運用が一部分は社會學的科學の存立に依存し、(二)體系的認識が歴史的認識に先行し、(三)純正社會學が應用社會學に先行することが、認められねばな

らぬ。

右に擧げた現代社會學に於ける個々の諸方針に於いて、社會の概念に關し三種の見解が現れて居るのを區別し得る。(一)社會を以つて、一の全體としての當代の文化の運載者たる性質に於いて考へられた、全體としての人類又は個々の民族又は個々の種族とする見解。この見解は、宗教、藝術、經濟、國家等凡ての文化現象は社會と稱せられる一の單一なる不可分の主體の屬性として現はれる、と見るのである。この統一體の中に於けるそれ以上の分枝或ひは區分 (Gliederung oder Unterscheidung) は認められない。全見解は、國家的及び國民的生活の統一を重んじはするがその分枝その多様その軋轢をば重んじない周知の有機體的國家學及び社會學の方針に屬する、と云ひ得る。(二)社會を以つて個々の獨立的に並存する個人から成立するものとし、社會の屬性はそれら個人の屬性によつて形成せられるとする見解。右に擧げた諸方針の中でこの見解を取るものとして第一に擧げられるのは自然科學の方針であるが故に、この見解に於いては、主として身體的性質が考へられて居る。この見解の根柢には、第一の見解に於けると著しい對立をなして、原子論的社會觀が横つて居るのである。従つて、その研究が基礎と見做すところのものは、社會と呼ぶ代りに、社會軀體

(Gesellschaftskörper) と呼び得る。而して、かゝる前提によつてその結果が混濁せられるか否かは、その問題提出に依存するのである。(三) 社會を以つて分肢を有する全體となし、成員の間に行はれる相互作用の研究を社會學の中心に置かうとする見解。この第三の見解は、統一體の思想に分肢の思想を加へ、それと同時に、文化の事實に關する考察から分離する。この見解をとる形式的社會學に就いては、すぐ次に詳論する。現今の社會學界に於いては、社會と云ふ語の多義にして漠然たるがために社會學の諸方針が屢々混同せられ交錯して居るのみならず、更に、一般に學界に於いて屢々起るところの研究の材料とその問題との取違へから別な危險が起つて居る。精神科學及び人間に關係する自然科学の諸研究が對象とするもので、何らかの爲方に於いて社會的生活をばその材料として居ないものは、殆ど無い。併し、その材料のみならずその問題も何らかの爲方に於いて社會に關係して居るのでなければ、その研究は、社會學的と稱し得ないのである。

三 形式的社會學の問題

フイーアカントは、次いで、形式的社會學の問題に就いて次のやうに論じ、彼自身の

社會學のプログラムを仄示して居る。

形式的社會學は、團體内に於ける諸關係 (Beziehungen und Verhältnisse) 並びにそれらの産物を取扱ふものである、と云ひ得る。(それ故に、フォン・ウイーゼは、これを關係學 (Beziehungskunde) と稱しようとする。) 舊い社會學は、これとは異り、これら産物そのものも文化社會の特殊な場合に於けるこれら産物を、かくて、社會の客觀化としての文化の現象そのものを、取扱ふに止つて居た。この方針は、特に人種鬭争及び階級鬭争の發見及び論究に於いて(これらにあつて團體の統一が部分團體の軋轢によつて横斷せられて居るだけ)分析の萌芽を示して居るのみである。而も、この場合に於いても、社會の國家的國民的形式が取扱はれて居るに止り、個々の階級は、それ以上に分解せられることなく全く統一體と認められて居るのである。

ここに形式的社會學の問題を決定するに當つて、先づ、團體の産物をば暫く度外視するが、なほ、他の見地から、形式的社會學の二つの主要課題を擧げ得る。これらは、兩つながら、古い歴史を有し、コントによつて創始せられた社會學と云ふ名稱よりも遙かに古い問題なのである。(一)その一は、社會の特殊な力 (die spezifische Kräfte der Gesellschaft) の問題である。人々は、これらをば、日常生活に於いては周知の如くに道德的な

力と稱し、國民的國家生活の特殊な場合に於いては好んで國家の力に對立せしめる。既に啓蒙時代に於いてホッブス或ひはグロテイツスの様式に従つて最初の社會學的研究が發達したのは實に、この問題に關してなのである。同じ意味に於いて、エーアリツヒは、『社會學は、社會的事象が行動する個人の意志にはなくそれから獨立に社會に於いて作用する力に歸せられるや、直ちに始まる。』と云つて居る。デュルケーム自身は、この問題を種々なる方面に就いて巧妙に論究して居る。服従の自由意志的性質に關するタルドの分析も、等しく重要である。而して、同じ對象に關するマクドーガルの研究も、心理學の立場から企てられては居るが、ここに擧げらるべきものである。ドイツに於いては、殊にジンメルが、この方針を發展して居る。これらは、主として知能下的な (subintelligent) 注意せられない或ひは意識せられない力であるが故に、今日に至るまで残りなく分析せられては居ないのである。(二)第二の主要問題は、社會は自然的構成物であるか人爲的構成物であるかと云ふ舊い爭論即ち個人主義と集團主義との對立から生ずるもので、それは、我々が正當な解釋から出發するや、直ちに、社會内に於ける人間の內的結合の様式 (die Art der inneren Verbundenheit der Menschen in der Gesellschaft) に關する問題となるのである。これに於いては、殊にトヘンニ

―スガ、グマインシャフト並びにそれと我々がゲゼルシャフトと稱するそれよりも弛緩せる結合形式との區別に關する論述によつて、新しい途を開拓して居る。これから、また、第一の問題に對しても、一光明が投せられるのである。何となれば、道德的な力を論ずることは、一般に、一の團體の成員の間に外的關係とは異なる別な關係が存立すると云ふ前提の下に於いてのみ、意味を有するからである。右に擧げたこれらの力の性質に關する諸研究は、社會内には特殊な内的結合の状態が存立することを前提して居り、且つ、この前提を確かめて居るのである。

形式的社會學の問題は、更に、方法に従つて(それに伴ひ、また、内容に従つて)二つの部類に區別せられる。(一)第一の問題部類は、社會の本質 (Wesen der Gesellschaft) と社會的動作方式及び關係一般 (gesellschaftliche Verhaltensweisen und Beziehungen überhaupt) との問題を中心とする。その方法は、現象學的である。何となれば、社會的生活は、我々に對し、心意的生活と等しく直接的に與へられて居るからである。而して、實に、我々は、今日、人間に關する事物は凡て特異の本質を有し、それは外界と比較することによつては明瞭にせられるよりも寧ろ不明にせられることを、知つて居る。かくて、人間の社會の本質も、直接の課題に於いて且つ直接に與へられる事實に於いて止るところの全

く獨立の考察法によつてのみ、明かにせられ得る。併し、これらの事實とは、我々各自に於いて絶えず起つて居るやうな社會的状態の體驗なのである。(二)第二の問題部類は、一般的な經驗的事實に關係するものであり、事物の歴史的多様の一般的概観による歸納の方法に於いて解答せられるものである。例へば、服従衝動や契約關係の本質は、現象學的に把捉せられるが、併し、長期に亙る權力行使は必ず規制せられて居るとか又は連帶は個人に對してではなく團體に對して役立つとか云ふ洞見は、歸納によつて獲得せられる。規制が人間の諸關係に於いて普く存在すると云ふことは、經驗のみがこれを示し得るのである。併し、この規制が如何なる內的性質を有するかと云ふことは、現象學の範域に屬する。かくて、我々は、一般的に、次のやうに云ひ得る。內的社會的状態の本質は、現象學的昂揚の體驗 (*Erlebnis der phänomenologische Erhebung*) として把捉せられるが、かかる状態の遍在及び、それと一定の外的状態との結合、云はば、それが一定の外的關係を着装することは、經驗によつてのみ確かめられると。前者は、觀念的構成物であり、後者は、その現實的具體化である。併し、我々の社會學の一般的部門に屬するのは、これら着装の一般的概観即ちその大なる類型、屬性及び規律性のみなのである。而して、我々がここに取扱ふべき諸事實は、もはや、純社會的性

質のものではなく、社會外的 (aussergesellschaftlich) な力の一系列によつても規定せられて居る。かくて、家族は、ゲマインシャフト關係の特殊な一形式であるが、これに於いては、性愛衝動や生殖や經濟的諸事實が大なる役割を演じて居る。又、國家は、一方に於いては、權力關係、法律關係及びゲマインシャフト關係の混同物であるが、他方に於いては、領土的、地理的及び經濟的諸力によつて甚しく影響せられて居るのである。

故に、我々がここに取扱ふべき諸概念は、社會學の立場から見れば體系的概念ではなく(他の經驗的諸因子を混合して居るが故に)歴史的概念と見做さるべきものである。かくて、權力關係は體系的概念であるに反して、その特殊な形式としての階級關係は、歴史的概念である。同じく、國家も國民も、社會の歴史的形式である。而して、ここに述べた歴史的概念と體系的概念との區別は、この場合に於いては、經驗的概念と先驗的概念との區別に一致する。併し、云ふまでもなく、この一致は必然的なものではなく、體系的概念は經驗的性質のものでもあり得る。

かゝる基礎に基いて、廣大なる研究が發達し得る。即ち、一方に於いては、凡ての文化財に於いて一定の團體の相互作用の客觀化即ち產物を認める、一般的文化學 (eine allgemeine Kulturlehre) であり、他方に於いては、人間の生活の個々の諸基本現象をばそれ

らの特殊な歴史的形成に於いて(例へば、組合的關係をば自然民族の編制に於いて、支配的關係をば高等文化、民族の國家組織及び階級組織に於いて、ゲマインシャフト關係をば男子團結又は國家に於いて等)研究する、特殊の社會學(*eine spezielle Gesellschaftslehre*)である。これらの問題部類に於いて、それぞれの歴史的科學に對する關係が如何になるか、ここに取扱はれるのは歴史的科學と社會學との限界領域であるか若しくは本來の社會學であるか、と云ふ問題は、副次的なものであり、それは、形式的社會學がその(今日の)貧弱な内容を以つて獨自の一科學を構成するか若しくは單に比較的に纏つてゐる一問題部類を構成するに過ぎないか、と云ふ問題と等しく、閑問題である。研究が成就せられるまで、その論理的性質は、詳しくは判斷せられ得ぬであらう。ここには、ただ、再び、研究の單なる材料が如何やうにかして社會學的概念によつて把握せられるからと云つてそれをば廣義に於いてさへも社會學とは云ひ得ない、と云ふことを、警告するに止めて置く。完成せる文化構成物がそのまま研究の對象となるのではなく、その背後に於いて行はれる團體内に於ける相互作用が研究の對象となり、かくて、かの文化構成物そのものはこの相互作用の沈澱物として見られる場合にのみ、その研究は、社會學的と認められるのである。本書は、かかる歴史的類型の區

別の始源をも、その現象學的體系的的基本研究と共に、包含する。

従つて、形式的社會學は、一層發達すれば、幾分か、舊方針が攷究して來たものと同ーの問題を攷究することになるであらう。形式的社會學は、もともと、この問題をば回避するものではなく、自身を深め自身に批判的精神を具へる力を集めるために迂路を辿るものに外ならないのである。

諸精神科學に對する或ひは社會學を應用しようとする實際生活に對する形式的社會學の關係は、物理學或ひは工學に對する數學の關係に類似する。數學は物理學を必要としないが、物理學は數學を必要とする。數學は、初め物理學や工學の要求に顧慮しないほど而して自らの進路を單に自らの關心のみによつて決定するほど、ますますよくそれらの學に役立ち得るであらう。數學は、さうすることによつて、自らの發展のため一層大なる範圍を保有し、それと共に、その發見に於いて他の學又は實際的要求の目的に利用せられる贈物を提供する一層大なる可能を獲得しもするのである。¹⁾

1. *フイーアカント*は、一九〇九年 *Monatsschrift für Soziologie* に發表した論文 *Soziologie als empirisch betriebene Einzelwissenschaft* に於いて、初めて、組織的に社會學の對象及び任務並びにその方法を論述して居る。右に要約した今日の彼の社會學概念をば最

初めそれと比較するために、米田博士の紹介によつて、次にその趣旨を要約して置く。——社會學的方法から區別せられる社會學的科學その中でも社會的人類學及び應用社會學を除外した純正社會學或ひは純理社會學の範圍内に於いて、人間生活の身體的方面か又は精神的方面か又は文化的方面かを専ら研究する一定の諸學科の一定の諸部分の百科全書的一種として社會學を立てようとする見解と、社會や文化や歴史の哲學的諸問題を對象とする社會哲學として社會學を立てようとする見解と、一の特殊學として社會學を立てようとする見解とが、區別せられる。シンメルやトエンニスやデュルケムによつて確定せられた第三の見解の主張をやや自由に云ひ表せば、社會學の一般の問題となるものは諸個人の間の心的關係一層詳しく云へば種々なる心的過程が相互に衝突し又それによつて相互に影響せられる爲方であること、より多く過程及び關係そのものに關する問題とより多くそれら過程及び關係の永續的結果に關する問題との二つの問題部類がここに區別せられること、心理學の研究すべき現象或ひは過程の範疇は個人心生活の限界内に包含せられるに反して社會學は各個人に於いて行はれる種々なる心的因果系列の交叉或ひは一團體内の種々なる個人の組み合わせを研究すべきものとするに個人心と個人心との間の因果の學であること等である。各科學はその材料を最も單純な要素に分析し得るほど愈々眞實なる法則發見の理想に近くなるから、文化や歴史や社會の現象の機制を詳しく研究せずしては、従つて、ここに問題とする結合及び關係をば歴史の社會的生活の全體から抽出し人爲的に切離し出来るだけ單純な要素に分析せずしては、それらの現象の眞體を深く究明し得ない。而して、それが特殊學としての社會學の目標なのである。社會學の任務が特殊學に發達することにありとすれば、そのために新しい方法が必要となる。併し、それは、在來の舊方法即ち概念的論究の方法（一方に於いては、舊歴史哲學の辯證法的構想が、他方に於いては、シユタムラー派の認識論的研究がこれに屬する）並びに日常生活の觀察及び一般的な歴史的知識に基く方法（一方に於いては、興へられた材料から命題或ひは判定を抽出する一部分歸納法を用ゐるもの、他方に於いては、類型を設定しその中に個別現象を攝取するもの）を排斥して之に取り代るべきではなく、補充的に之と併用せらるべきである。その新方法とは、輓近の心理學を特殊學として發達せしめたそれと同様に、大量觀察の方法・實驗法・歴史的比較的方法である。（詳しくは、經濟論叢、第一九卷第三號、二六—三六頁參照）——

後者との間には、この小論の根柢をなす私たちの立場はかなりの距離を隔てて居るにも拘らず、前者との間には、それは多くの結合の可能を持つて居るやうに思はれる。

III

右の要約によつて察知せられる如く、*Gesellschaftslehre* に於いて完成せられて居るフーアカントの社會學の中心的部分は、一言にして云ふならば、ジンメルの社會學概念を框としてその中にトエンニス及びシュタウデインガーの社會論を盛り現象學の方法を借りてこれを展開しようとするものであると思ふ。これらの諸要素を一體系に綜合しようとする企圖は、それが一般に果して成功すべきものであるか而して若し成功すべきものであれば如何にしてかは別の問題として、フーアカントに於いては、遺憾ながら未だ成功して居るとは云ひ得ない。フォン・ウイーゼに従へば、この書は體系を持たないのである。而して、この書が體系を缺くのは、他の多くの同様な場合に於いて見られる如くに、種々なる立場に基いて成立する認識をばそれらの立場の相異を顧慮することなしに一の體系に綜合しようとする努力の結果ではなからうか。更に、右に要約した彼の社會學の根本概念の中にかかる無効なる努

力の痕跡が見出されないであらうか。私たちは、この疑問を念頭に置きつつ次に右の彼の所説を少しく考察しようとするのであるが、かくすることによつて、恐らくは、私たちが社會學に於ける自らの出發點を決定するに當り一見極めて平凡且つ自明なる事實を如何に重視しなければならぬかが、知られるであらう。

フイーアカントは、先づ、現代社會學に於ける歴史哲學的百科全書の方針を排斥しこれに對して分析的形式的方針を主張して居る。

併し、社會進化及び歴史發展の法則の定立及び意味の闡明を最後の目的として生れたコントの社會學は、初め暫くの間社會學をして粗雑な歴史哲學たらしめては居たけれども、社會の歴史に於いて法則を求めようとする目的の追究は、いつの間にか、その對象の歴史たる性質をば剝奪し去つて後に社會の自然科學を殘すに至り、最近に至るまで否現在に於いても、少數の例外を除いて殆ど凡ての學者は、社會學をば本質的には自然科學として樹立することに意識的に努力しつつある。¹⁾更に、社會學の不必要乃至不可能を主張する者が從來の社會學の百科全書的な點を指摘する事は、例へば、一八八〇年代に於けるブリュッセル大學の二人の『卓越せる教育者』De

Greel' van der Rest ²⁾ の見解の相異に於いて、又、近く革命後の最初のドイツ政府がド

イツの大學教育を刷新するために社會學の講座を創設しようとしたのに對する von Below の反對に於いて、常に見られる事柄であるが、殆ど凡ての社會學者は、社會學が最も遅れて起り古くから存在して居る諸學の間に自らの位置を求めなければならなかつた科學であるために、早くから、社會學の獨立性及び自律性を確立することに意識的に努力して居り、社會學を非認する批評者の多くがその一理由とするところの社會學の概念が個々の社會學者に於いて千差萬別であると云ふことは、單に、かかる意識的努力が未だ一般的一致に到達して居ないことを意味するものに過ぎない。

この二つの事實は、輒近の社會學に於いて認められる共通の傾向なのであつて、ジエルの社會學も、實は、かかる傾向を示して居る一例に外ならないのである。かくて、現代の社會學者を支配して居る種々なる根本的思想の中から百科全書的要素と歴史哲學的要素とを除き去つた残りの凡てが、フイーアカントの立場に於て一の體系に綜合せられ得ぬ限り——彼は、かかる綜合が可能であると信じて居るのかも知れない、而して、本書は、かかる綜合の企圖の產物であるかも知れない——彼が、トロエルチに倣つて、現代の社會學に於ける二つの主要方針として歴史哲學的百科全書的方針と自らの方針とを對立せしめて居るのは、現代の多くの社會學者の共通的努力が

今日まで到達して居る種々なる結果を無視するものではなからうか。併し、この點に關しては、ここでは、これ以上に立ち入る必要が無いであらう。

- 1 Park and Burgess, Introduction to the Science of Sociology, Chap. I, Sociology and Social Sciences. は、この事實を詳説して居る。—— Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, 3. u. 4. Aufl., 1921. は、輒近の社會學界に於いて社會學を歴史哲學として發達せしめようとして居る唯一の要著であらう。なほ、私たちが最近にその講義を聞いた Leichter 教授は、Max Weber の社會學を普通史としての社會學に發達せしめようとして居られるが、その結果は、一種の歴史哲學になりはしないだらうか (Zum Methodenstreit in der Soziologie, 社會學雜誌、第一五及び一六號)。——現象學の立場から科學としての社會學の本質を明かにしようとする Krcmar は、"das Leben der vergesellschafteten Menschen lediglich insoweit, als es infolge Vergesellschaftung regelhaft verläuft" を以つて社會學の對象となし且つかかる社會學をば歴史・比較社會史(比較文化史)・歴史哲學(社會哲學)・唯物史觀及び記述心理學から區別する際に與へて居る次の注意を、私は興味深く感じた。『純正社會學に歸せらるべき實在領域の認識に至る途を開いたものは、主としてスペンサーによつて建設せられた所謂「有機的方法」(organische Methode)の歴史的功績である。それは、社會動物有機體と比較し兩方の生物の器官並びにこの器官によつて營まれる機能の間に平行を認めることによつて、社會的存在の諸狀態及び諸過程は歴史的時間より解放し、かくて、その部分に對して特に社會學的新見方を準備した。それは、事件から歴史の個別性を、離しその抽象によつて社會的事象の法則性を立證しようとしたのである。』(Soziologie als Wissenschaft, S. 28f.)

2 Giddings, The Principles of Sociology, 1896, p. 29f.

3 米田博士、獨逸最近の社會學論、經濟論叢、第一八卷第三及び四號。

私たちがここで關心するのは、フイーアカントが所謂分析的形式的方針によつて實際に於いては何を意味して居るかである。彼は、自分の社會學がジンメルによつて

て創始せられた個別科學的形式的分析的社會學を正當に發展して居るものなることを云ふのみに止る。ジンメルの社會學の方針を個別科學的形式的分析的と見ることに對しては、大體に於いて、異論が無いであらうが、フイーアカントは、彼がこのジンメルの社會學の方針をば如何に解釋するかに就いては一言をも費して居ない。私たちは、直接に、彼の社會學概念をジンメルのそれに比較することによつて、このことを察知しなければならぬのである。私たちは、次に、フイーアカントの社會學概念の核心を成す諸思想をジンメルのそれに結びつつ吟味しようとする。¹⁾²⁾

1 ジンメルの所説の解釋に就いては、米田博士の大正十一年度の講義「ジンメル社會學の批判的考察」に負ふところ極めて多大である。

2 ハリに關係あるジンメルの所説を、次に、*Soziologie, Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, 1908, I. Kapitel, Das Problem der Soziologie, から抜粋して置く。*(但し、頁づけは、1922 第二版による。)

彼は、先づ、凡ての科學が抽象に基くこと、社會學も社會的歴史の所興を一の抽象に附することによつて一の特殊科學となることを、主張する。「人間は社會的存在物として理解せられなければならない」と云ふこと及び社會は凡ての歴史的事象の運載者であること云ふことに基く限りに於いては、社會學は、既存の諸科學の一に於いて取扱はれて居ない *Objekt* を全く含まず、單にこれらの凡てに對する新しい一の道即ち科學の一の方法を含むに止り、これは、凡ての問題に適用せられること云ふことそのことの故に、それ自らに於いては獨自の一科學を成さない。然らば、その研究が社會學をば獨立の確定せられた限界を持つ一科學たらしめるところの獨自の新しい *Objekt* は、何か。社會學が新しい一科學として認められるためには、必ずしも、それが今ま

でその存在を知られなかつた Gegenstand を發見することを必要しないと云ふことは、明白である。我々が直接に Gegenstand を呼ぶ凡てのものは、Bestimmungen 及び Bezeichnungen の複合であつて、その各々が、Gegenstände の多數に於いて現れ、特殊な一科學の Objekt となり得るのである。各科學は、統一せるものとしては何れの科學によつても把握せられ得ない何らかの事物の全體をばその諸方面の逐一に就いて一々の概念の見地から考察するものであるから、一の抽象に基いて居るのである。……特殊科學としての社會學も、その事實としては全く知られて居るさころの諸事實を通じ新しい一線を引くのみで、その特殊な Objekt を見出し得るであらう。ただ、社會學が漸に引く線に屬する方面をばこれらの事實の凡てに共通して居り且つ方法的科學的統一を構成する方面として示すさころの概念が今まで適用せられて居ないことが、必要なるのみである。……社會學と云ふものが特殊科學として存立すべきならば、あるがままの社會の概念即ち社會的歴史の所興は、或るこれまでは他の種々なる結合に於いてのみ注意せられて居たその Bestimmungen が相屬的なものとして従つて一の科學の Objekt として認識せられるやうに、一の新しい抽象及び整理に附せられる必要がある。』(S. 34.)

彼は、次いで、社會學がそれによつて存立すべき抽象を決定するために、社會の形式と内容とを區別する。『この見地は、社會の形式と内容との區別を稱せられ得るさころの社會概念の分析によつて獲られる。但し、これは、この場合に於いては、區別せらるべき要素の對立を近似的に名けるための一の比喻に過ぎないことを、強調して置く。この對立は、この屢々用ゐられる名稱の他の意義によつて偏見をつくられることなく、その獨特の意味に於いて直接に把握せられなければならないのである。私は、ここに、定義のための論争を能ふ限り斥ける最も廣い社會の觀念から出發する。即ち、最廣義に於ける社會は、數多の個人が *Wesentlich Wirkenden* に入るさころに存在するのである。この相互作用は、常に、一定の衝動から或ひは一定の目的のために生起する。性的・宗教的或ひは單なる社交的衝動、防衛や攻撃・遊戯や獲利・救助や教訓の目的、その他無數の衝動或ひは目的は、人間をして *Zusammensein* に又は *Freiander, Miteinander, Gegendander-Handeln* に又は *Korrelation der Zustände mit andern* に入らしめる、即ち、他人に作用を及ぼしめ且つ他人から作用を受けしめるのである。これらの相互作用は、かの動因たる衝動及び目的の個人的運載者から一の統一即ち「社會」そのものが生起することを意味する。蓋し、經驗的意味に於ける統一は、諸要素の相互作用に

外ならないからである。……その Einheit 或ひは Vorgesellschaftung は、相互作用の種類及び疎密によつて甚しくその程度を異にする。……私は、凡ての歴史的實在の直接に具體的な Ort たる諸個人に於いて Trieb, Interesse, Zweck, Neigung, psychische Zuständlichkeit 及び Bewegung をしてそれから或ひはそれに於いて他人に對する作用及び他人の作用の受容が生起するやうに存在するものの凡てのものを、社會化の Inhalt 又は Material と稱する。生活を充すこれらの資料、生活を動すこれらの動因は、それ自らに於いては、未だ社會的なものではない。……それらは、諸個人の孤立的 Notwendigkeit をは相互作用と云ふ一般的概念の下に屬する Miteinander 及び Füreinander の一定の諸形式に形成することによつて、初めて、社會化を構成するのである。かくて、社會化は、無數の種々なる様式に於いて實現せらるる形式であり、それに於いて、諸個人は、かの——感覺的な又は觀念的な、暫存的な又は持続的な意識的な又は無意識的な、因果的に驅る又は目的論的に引く——Interesse に基いて一の統一を合成し、その中に於いて、これらの Interesse は實現せられるのである。』(S.41.)

彼は、かくて、社會學は社會の形式を對象とすることによつ、一の特殊科學となる、と考へるのである。『この語のこれまで通用して來た凡ての意味に於いて、「社會」をばまさしく社會たらしめるものは、明かに、右に示した相互作用の諸様式である。……かくて、社會を Gegenstand としそれ以外の何ものをも Gegenstand としない一科學が存在すべきならば、それは、これらの相互作用・これらの社會化の様式及び形式を研究しようとするものでなければならぬ。實際に於いては不可離的に合一して居るこの社會化の形式と内容とが科學的抽象に於いて分離せられること、相互作用或ひは社會化の諸形式がそれらによつて初めて社會的なものとなることの内容から思惟に於いて引き離されて總括せられ一の統一の科學的見地の下に方法的に置かれること——私は、これが社會そのものに關する一の特殊科學を基礎づける唯一の可能である、と思ふ。……實在の複合或ひはまた統一から科學を産出する唯一の方法たるかかる抽象は、認識の内部的必要から強く要求せられるものであらうが、なほ、それを正常とする何らかの理由が、Objektivität そのものの構造の中に存在せねばならない。蓋し、事實に對し何らかの機能的關係を持つと云ふものが、問題提出を無効ならしめず科學的概念構成を偶然的ならしめないからである。……歴史的社會的現象に就いて形式と内容とを分析し前者を一の綜合に齎す權利は、事實からのみ徵驗せられ得る二つの條件に基くものであらう。即ち、一方

に於いては、同様な社會化の形式が全く相異せる内容に於いて全く相異せる目的のために出現し、他方に於いては、同様な内容的 *Interesse* がその運載者或ひは實現様式として全く相異せる社會化の形式を纏ふさ云ふことが、見出されなければならない。

これは、同様な幾何學的形式が相異せる物質に於いて見出され同様な物質が相異せる空間形式に於いて出現するやうなものであり、或ひは、論理的形式と質料的認識内容との間にこれと照應する關係が存立するやうなものである。……かくて、實際の所與に於いては資料と形式とが社會的生活と云ふ不可離の統一を形成して居るにもせよ、右に述べた事實は、社會學的問題をば正當とし社會化の純形式的の確定・體系的整序・心理學的基礎づけ及び歴史的展開を要求するのである。(S. 71)

彼は、續いて、社會學と諸社會科學との差異を次のやうに説く。「この問題は、在來の個々の諸社會科學が創造せられた爲方に對して正反對をなす。蓋し、後者の間に於ける分業は、内容の差異によつて規定せられて居るからである。……我々が歴史的實在をば區別せられた研究領域に分割するためにそれを通じて引くところの諸線が同様な *Interessen* 内容を示す諸點を結合するのみならば——この實在が特殊な社會學に對して全く餘地を與へないならば、これまで引かれて居る凡ての線を横切り社會化の純事實をばその種々なる形成に從つて維多な内容との結合から引き離し一の特殊領域として構成する一線が、必要である。かくすることによつて、社會學は、認識論が認識の諸範疇或ひは諸機能そのものを個々の事物に關する認識の多様から抽象することによつて一の特殊學となつて居るさ同一の意味に於いて——云ふまでもなく、方法及び結果は差異するが——一の特殊科學となるのである。」(S. 71)

彼は、かくて、所謂抽象的社會概念と所謂具體的社會概念とを區別し、社會學は前者のみを對象とし後者を他の諸科學に譲ると説く。「社會の概念は、科學的取扱ひに對しては嚴密に區別せらるべき二つの意義を包含する。第一に、それは、社會化せられた諸個人の複合體であり、全歴史的實在を構成するやうに社會的に形式せられた *Materienmaterial* である。併し、「社會」は、また、第一の意味に於ける社會そのものを諸個人から産出するところの *Beziehungsformen* の總和である。これは、一定の形をした物質も「球」と稱せられ、又、第一の意味に於ける球を單なる物質から産出する單なる形式も數學的意味に於いて「球」と稱せられるのに類する。第一の意味に從つて社會學を考へるならば、その *Objekt* は、社會の中にも社會と共に進行する凡てのものである

が、第二の意味に於ける社會學は、人間がそれによつて社會化せられるところの從つて獨立の表現に於いて嚴密な意味に於ける「社會」を完成するところの *Kritik*, *Beziehungen* 及び *Formen*、即ち、社會化の内容その質料的 *Zweck* 及び *Interesse* の特殊な諸制限が屢々或ひは常にその特殊な *Formung* を決定するやふ事情によつては云ふまでもなく變更せられぬものを *Gegenstand* とするのである。……かくて、他の無数の見地に於いても科學の *Objekt* たり得る人間の *Gesellschaft-Sein* に關する學として社會學の他の諸特殊科學に對する關係は、物質に關する物理學的化學的諸科學に對する幾何學的關係に類する。幾何學も社會學も、内容或ひは *Vorlescheinung* の研究をば他の諸科學に委譲するのである。(S. 8—10.)

彼は、次に、社會學が客觀的構成物或ひは組織にまで高まらず顯微鏡によつてのみ認められる社會化を重視しなければならぬことを、主張する。『社會化的相互作用の諸形式をば社會の全體現象から區別することによつて構成せられる問題領域に於いて、ここに提案せられた諸研究の或る部分は、既に、云はば分量的には他の社會學的承認せられた諸課題の範圍外に存在する。即ち、その總和が結合して社會を産出するところの諸個人の間に変換せられる影響を問題とすれば、直ちに、社會學に於いて、これまで一般に取り入れられて居なかつたところの或ひはその原理的な重要な意義を洞見しては取り入れられて居なかつたところの *Beziehungsformen* の一系、云はば一世界が出現するのである。全體として見れば、社會學は、本來、相互作用する *Kritik* がその直接の運載者から少くとも觀念的統一體に結晶せられて居るやうな社會的諸現象のみに制限せられて來た。……社會的 *Interessensphänomene* 及び *Aktionsrichtung* が大であり重要であり支配的であるほど、それだけ、直接の個人と個人との間に行はれる生活及び作用をば個々の第一次的な諸過程の彼方にある客觀的構成物に抽象的存在に高めることが起り易い、と云ふことは、明白である。併し、これは、二つの方面に就いて重要な補充を必要とする。かの頗る分明でありその範圍とその外的重要さを至る處に示す諸現象の外に、小く個々の場合に於いては重要でないやうに見えるが而もこれらの個々の場合によつて決して輕視せらるべからざる度合に於いて示され、且つ、宏大な云はば *offiziell* な社會的 *Formung* の間に入り込むことによつて初めて我々が知るやうな社會を産出するところの、人間との *Beziehungsformen* 及び *Wechselwirkungstypen* が、無數に存在する。社會學を前者のみに制限するは、確實に限界が定められる大なる器官即ち心臓や肝臓や肺や胃等のみに制限せられて居てそれなくてはかの

判明な器官が決して一の生ける身體を生じ得ないところの普通には擧げられない或ひは知られない無數の組織を無視して居た昔の人體内部の科學に類するのである。……人間の間に於ける社會化は、絶えず結合し分離し更に新しく結合して居る。それは、本來の Organismen にまで高まらぬ場合にも諸個人を結びつけるところの永久の流動及び脈搏である。ここに、云はば、Menschennaterial の中に於ける mikroskopisch-molekular な諸過程が問題となるのであつて、それらは、やがてかの makroskopisch な確固たる統一及び體系に結合せられ固化せられるところの現實の事象である。人間が互ひに見合ふこと・互ひに競ひ合ふこと・互ひに手紙を交し又は共に書齋を取ること・明白に理解せられる利害の全く外にあつて互ひに同情的に或ひは反感的に接し合ふこと・利他的行爲に對する感謝が解けないその後の關係を生むこと・一人が他に途を問ふこと・互ひに衣服を着せ合ひ裝飾を施し合ふこと——個人と個人との間に行はれる一時的な又は持続的な意識的な又は無意識的な・そのまま過ぎ去る又は多くの結果を生む無數の Begehungen が、我々を絶えず結びつけて居るのであつて、右に擧げた例は、それから全く偶然的に選ばれたものに過ぎない。各瞬間に於いて、かかる絲は、紡がれ・棄てられ・再び取り上げられ・他の絲と代へられ・他の絲と織られて居る。ここに、明瞭にして而も謎たる社會生活の粘着性・伸縮性・多様性・統一性を運載するところの、心理學的顯微鏡によつてのみ認められる、社會の原子の間に行はれる相互作用が、存在するのである。』(S. 141)

彼は、なほ、社會學の對象は心理的現象であるが社會學はその形式を研究することによつて心理學とは異なる、と主張する。『凡ての社會的 Vorgänge 及び Institute がその Sitz を Seele の中に有すること、社會化が一の心理的現象であること、及び、多數の要素が一の統一體となること云ふそれの基本的事實に對しては形體的なるものの中には類比さへも存しないものに就いては、勿論、何らの疑ひも無い。いかなる外部的事象をば我々が社會的と稱するにしても、もしも、我々が心理的動機たる感情や思想や慾望をば唯にその外部的事實の運載者としてのみならず更にその本質的なるもの我々にとり本來唯一の關心的なるものととして全く自明的に認識するのでなければ、それは、雲が渦巻くことや樹枝の交錯して成長すること以上に了解せられず意義を持たない人形芝居であらう。かくて、凡ての社會的事象の因果的理解は、實際に於いて、心理學的確定及びその發展が「心理學的法則」——この概念は我々にまつては大いに問題であるが——に従つてこれらの事實を完全に演繹することを許す時に、

獲られるであらう。また、歴史的社會的存在の我々にとり到達し得る被了解性は、我々が本能的心理學又は方法的心理學の何れかを以つて追構成して問題たる發展の *innere Plausibilität*・心理的必然性の感情に齎すべきの心理的連鎖に外ならないことに就いても、何らの疑ひが無い。さうである限りに於いて、社會的狀態の凡ての記述は、心理學的知識の一應用である。併し、心理的事實の科學的取扱ひが必ずしも心理學たるを要しないと云ふことは、諸精神科學一般の諸原理に對して最も方法的に重要なことであり且つ實に決定的なことである。……人間が互ひに影響し合ふこと、一人が他人がそこに存在し自らを表出し行動し或ひは感ずるが故に或ることをなば爲し或ひは爲され一の存在或ひは轉化を示すこと、これは、云ふまでもなく心理的現象であり、而して、その凡ての個々の場合の歴史的出現は、ただ心理學的 *Nachkommen* により心理學的系列の *Plausibilität* により外部的に確言せられるものの心理學的範疇を用ひての解釋によつてのみ了解せられる。併し、一の特殊な科學的意圖は、この心理的事象を心理的事象としては全く顧慮せず、その諸内容をばそれらが社會化の概念の下に整理せられる如くにそれ自身のために追求し分析し關係づけ得る。例へば、*Pinus inter pares* の形式を持つてこの強者と弱者との關係は、類型的には、強者の絶對的な權力の確立となり平等の要素を次第に排除する傾向を有する、と云ふことが、確定せられたとする。これは、歴史的實在に於いては一の心理的過程であるにもせよ、我々が社會學的見地から見て關心するのは、單に、*Ueber- und Unterordnung* の種々なる段階がこの場合に如何に相連絡するか、一定の關係に於ける *Ueberordnung* が他の關係に於ける *Gleichordnung* と如何なる度合まで一致し得るか、前者に於ける *Uebermacht* の如何なる度合によつて後者が全く廢棄せられるか、結合の問題や協働の可能はかかる發展の初めの段階に於いて一層大であるか後の段階に於いて一層大であるか、等のみである。……これは、*Formis* !!! しては、心理學的にのみ理解せられ記述せられ得るであらう。併し、社會學的 *Formis* として見られる場合には、二人の個人の各々に於いて經過する心理的系列は、それ自身に於いては重要でなく、*Einmal* 及び *Entweining* の範疇の下に於ける兩者の *Synopsis* が重要なるのである。……要するに、たとひ過程の單數的な或ひは類型的な記述そのものは常に心理學的のみあり得るにせよ、その觀察が人間の *Beziehungsförmigen* の實現としては如何に叙述せらるべきか、それが社會學的範疇の如何なる特殊な結合を示現するか、が、重要なるのである。前述の仄示に従つて、これは、尤も決して全く同一ではないが、板の

上に畫かれた圖形に於いて行はれる幾何學的演繹に比せられ得る。ここに與へられ見られ得るものは、物理的に引かれた白墨線のみであるが、我々が幾何學的考察に於いて意味するものは、それではなく、白墨粉の層としてのかの物理的圖形とは全く性質を異にするところの——それは、他方に於いては、かかる物理的構成物としても科學的諸範疇の下に取り入れられ、例へば、その生理學的出現やその化學的性質やその光學的印象が特殊な諸研究の對象となり得るが——幾何學的概念から見たその意義である。かくて、社會學の諸所與は、その直接の實在は先づ心理學的諸範疇に對して自らを提供するところの心理的諸過程であるが、これらば、たゞひ事實の記述にとつては不可缺であるにせよ、社會學的考察の目的の外に存する。社會學的考察の目的は、寧ろ、心理的諸過程によつて運載せられ且つ屢々それらによつてのみ記述せられるところの Sachlichkeit der Vergesellschaftung の中のみ存する——宛も、劇が、初めから終りまで心理學的諸過程のみを含み心理學的にのみ理解せられ得ながら、而も、心理學的諸認識の中にはなく心理的諸過程の内容が悲劇や藝術形式や生活象徴の諸見地の下に於いて構成する綜合の中にその意圖を持つが如くに。』(S. 171-191)

(此項未完)